蚤

斎藤茂吉

蚤という昆虫は夏分になると至るところに居るが、安眠を妨害して、困りものである。

生れ故郷の村にも蚤は沢山いたが、東京という大都会には蚤なんか居ないだろうと想像して、さて東京に来てみると、東京にも蚤が沢山いた。

それは明治二十九年時分の話で、僕は浅草の三筋町に住んでいた。その家（浅草医院といった）の診察室に絨緞が敷いてあったが、その絨緞を一寸めくると、蚤の幼虫も沢山つかまえることが出来た。それから繭をつくって、蛹（さなぎ）になったのも居た。僕はそれ等をあつめ、重曹の明瓶などに飼っていたことがある。無論

蚤の成虫もつかまえて飼って居た。時々前膊の皮膚に瓶（びん）の口（くち）を当てて血を吸わせたりする。蚤の雄（おす）が一瞬に飛ついて雌（めす）と交尾したりするありさまを見る。蛹がようやく色が濃くなって成虫になるありさまを見る。瓶の口には紙のふたをし、針でこまかい穴をあけて置けば死なずに居る。

　中学校を卒えて高等学校に入った。そこの寄宿寮に二年いたが、寝室に蚤が沢山いて安眠がどうしても出来ない。それにストームなどという習慣があり、学生が酒に酔って来て、折角寝入ったものを起してあるくので、益々眠れなくなる。僕は致方がないから、病人

用ベッドのカバアを改良して袋にした。そうして全身裸でその中にもぐり、くびの処を巾著のように締めるように工夫して、毎夜辛うじて明かすことが出来た。それでも翌朝袋の中を見ると、蚤が五六ぴきから十ぴき位這入って居り居りしたものである。それほど寄宿寮には蚤が多かった。

学生らは、いわゆる勤倹尚武だから、蚤なんかにまいってしまうような学生は学生でないような顔付をしたが、僕はなかなかそういう具合には行かなかった。

それから数十年が経過した。追々国民の衛生思想が発達し、春秋の大掃除も励行せられ、或る家では、畳

の下に新聞紙を敷き、その上にナフタリンを撒いて、蚤を幼虫のうちに退治することが出来るので、一般に蚤の発生が尠くなって行った。地方の旅館などでも、蚤の居る旅館の方が却って少いというほどまでになった。

僕は柿本人麿の歿処を考証するために石見国を旅行したことがあったが、石見の僻村旅館でも蚤のいない旅館がいくらもあるという状態にあり、僕は一般衛生思想の発達に感謝した程であった。

しかるにどうであろうか。一たび戦争になるや、急転直下に蚤の発生が増大し、如何ともすべからざるま

でに至った。特に疎開児童の居る旅館などといったら、殆ど言語に絶するほど蚤が沢山いた。

僕は終戦の年に山形県の生れ故郷に疎開したが、そのときも先ず夏季の蚤を恐れた。そこで、出来るだけナフタリンを集めることに努力し、部屋の蚤を出来るだけ少くしようとした。

それでもいよいよ夏になってみると、驚くべきほど沢山の蚤がいた。僕は致方なく、古い布で袋を作ってもらい、嘗て高等学校の寄宿寮で為したようにし、一睡一醒の状態で辛うじて一夏をおくったが、蚤等は、袋の中に這入れない時には、僕の頸のところに集って

来て存分血を吸うので、彼等にとってはそれで満足することが出来るのである。また一つ二つ袋の中に這入った奴を捕えようとすると電燈をつけるのが難儀だったりして、実にひどいめに逢ったのであった。

それから蚤という奴はなかなか悧巧で、その袋を池に持って行ってはたいたりしても、なかなか旨く池の方へばかり跳ねるというわけには行かない。実に厄介な奴である。

昭和二十一年の一月に、大石田というところに移転したが、三月はじめから肋膜炎になって臥床していると、四月にはもう蚤が出た。一つ二つに過ぎなかった

ものが段々ふえてくる。気がいらいらしていると、雇った看護婦が親切でよくその蚤を捕えてくれくれした。看護婦はその捕えた蚤のまだ生きているのを縫針に突きとおし、ハリツケデゴザイマスなどと言って自分のところに持って来てくれるので、枕頭でそれを見乍ら心を慰めて居るという具合であった。

自分のまだ臥していたころ、ＤＤＴという薬のことが噂にのぼり、汽車の乗客が停車場で体ぢゅう撒かれたなどという話が伝わった。ある時看護婦が町の薬種屋から少しばかりその薬を買って来てくれた。

それを試しに畳のうえ、布団の上などに撒いていた

ところが、どうも蚤が減ったような気がする。これはおもしろいとおもって、そこで県庁の衛生課に願ってもっと多くの分量をもらい、畳の白くなるほど撒布しておいたところが、いつということなく蚤が出なくなる傾向を示した。おかげ（真におかげさま）で、昭和二十一年の夏は、僕発明の蚤よけ袋の中に這入る必要もなく、病後の身を安らかに過ごすことが出来たのである。

蚤という昆虫はいつ日本に渡来したものか、枕草子に、『もたぐるようにして』などと書いてあるところを見ると、あのあたりの平安朝女性もやはり蚤には相当

悩まされたものと見える。

蚤は昼も出て来るけれども、大概夜出てくる。そうして暁方の五時ころからそろそろ逃げはじめる、そういう悧巧なところがある。そうして、あの赤褐色に光る奴が、まさに跳ね飛ぼうとする体勢の時が、一番美しいようだ。

ＤＤＴの発明は瑞西国人によって成されたということを聞いたが本当であろうか。いずれにしても大発明の一つである。僕のような蚤を恐れる人間でも、こういう薬の発明されたうえは、もう安心して蚤を客観的に取扱うことが出来る。ウィンのプラーテル、ベルリ

ンのルナパークあたりでは、蚤の見世物があった。蚤に小さい砲車を引かせたりして、ワーテルロー出陣の場面だなどと説明するのは、邪気がなくておもしろい。そうしてもはや傍観的客観的見物的である。ところがいつぞや森鷗外の椋鳥通信を読むに、独逸の蚤を見世物のために亜米利加に連れて行こうとすると、亜米利加の為政者がそれを禁止したということが出ていた。独逸蚤との混血によって亜米利加蚤の性（たち）が悪くなるという学理に拠ったものであった。こうなるともはや純客観というわけにはいかない。

昭和二十二年の冬に疎開先を引きあげて東京に帰っ

て来た。蚤が居るかとおもうと蚤がいない。これはDDT撒布のたまものであった。昭和二十三年になった。春の彼岸あたりは蚤が出るかとおもうと、蚤が出ない。夏至ごろになったら蚤が出るとおもうとやはり出ない。僕は汗をかきながら、蚤のいない夏床のうえに眠ることが出来た。

底本：「日本の名随筆18　夏」作品社
１９８４（昭和59）年４月25日第１刷発行
１９９９（平成11）年11月20日第20刷発行
底本の親本：「斎藤茂吉全集　第七巻」岩波書店
１９７５（昭和50）年６月初版発行
入力：門田裕志
校正：氷魚、多羅尾伴内
２００３年12月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。